

ロヒール・ファン・デル・ウェイデン作〈コロンバ三連画〉の制作事情 ——ケルン商人のネットワークを手がかりに——

蜷川 順子（関西大学）

ロヒール・ファン・デル・ウェイデンおよびその工房の手になるとほぼ一致して認められている、ミュンヘンのアルテ・ピナコテークにある〈マギの礼拝三連画〉は、ケルン最古の教区教会であったコロンバ聖堂の、かつてヴァッサーヴァス家の礼拝堂だった聖堂北側の洗礼堂にあったという1801年の財産目録の記述に基づき、〈コロンバ三連画〉とも呼ばれている。ヴァッサーヴァス家の礼拝堂を本来の設置場所とする考え方は、三連画のサイズが大きすぎることを根拠に、1971年にシュルツによって退けられたが、この問題は、1990年代のクーレンカムプやシュミットらの研究により新たな局面を迎えることになる。すなわち、その場所はケルンの商人ヨハン・リンク1世が聖堂内に建立した聖母礼拝堂に二つ設置されていた聖母祭壇のうちの北西側のものであったこと、この祭壇は1448年から58年の間にヨハン・ダス1世の未亡人グドゥラが亡き夫のために建立したものであったこと、などが明らかにされた。二人のヨハンの出身であるリンク家とダス家は、15世紀前半に共同でイングランドとの交易を開発したケルンの名門だが、その業務が危険を伴っていたため、1447年頃に交易相手をイングランドからブルゴーニュ公の支配下にあったネーデルラントへと変えようとしていた。また、この年におこなわれた二人の子供たちの婚姻によって、彼らの絆はさらに強められた。

イングランドとの交易を専門とするケルンの同業者組合ガッフェル・ウィンデックには、ロベール・カンパンの工房で制作された〈メロド三連画〉の注文主が属していた可能性が高いエンゲルブレヒト家も加わっていた。ケルンと、トゥルネーやブリュッセルに活動拠点のあった画家たちとが繋がる理由は、従来あまり明らかにされていなかったが、ここでは注文主たちが同じ活動圏にいた事実に基づいて、その解明を試みる。

〈コロンバ三連画〉の画面においても、リンクらが扱った主要品目である金属製品が前面に描かれている点などに注目する。このような形で取り扱う商品を明示する手法は、〈メロド三連画〉の布地の場合と共通するからである。さらに、本作品が頻繁に比較される〈ブラデリン三連画〉との類似性についても、交易先をブルゴーニュ公家へと変えようとする注文主の事情が関係していたと思われる。

以上のような考察を経て、〈コロンバ三連画〉は、ケルンの商人であったヨハン・リンクとヨハン・ダスが、安定と安全を求めて交易先を変え、また、子供たちの婚姻が成立した1447年頃にロヒール工房に注文されたと結論付け、新たなビジネスの成功と子孫の繁栄を願ったものであったことを図像面からも明らかにする。また、この時期ロヒールは極めて多忙であったため、工房の弟子が関与した可能性を様式面からも指摘する。